

## ジェンダーの視点で読み直す／書き換えるアメリカ文学 ——「女たち」の語りを中心に

司会・講師 松本 ユキ（近畿大学）  
講師 北口 未来（関西学院大学・院）  
講師 楠元 淳平（京都大学・院）  
講師 田所 朱莉（大阪大学）

ジェンダーという批評の枠組みは、いつごろどのようにして取り入れられたのだろうか。歴史家の Joan Wallach Scott によると、ジェンダーが分析カテゴリーとして注目を集めるようになったのは、20世紀後半にすぎない。ジェンダー研究は、「女」をある本質として捉えようとする欲望に抗い、社会的・政治的システムとより密接に結びついたジェンダーという視点を取り入れていくにはどうすればよいのか、という問題に取り組んできた。

ジェンダーという概念が不在であった時代、アメリカ文学において「女」という存在はどのように描かれてきたのだろうか。歴史の中に実際に語り手として登場する女性は数少なく、偉大な語り手あるいは書き手は、そのほとんどが男性であった。女性の問題にさらに階級や人種の問題が加わると、彼女たちの語りに耳を傾けることはより困難となる。失われてしまった「女たち」の語りはどのような形で再発見あるいは再構築されるのか。Scott や Judith Butler が問題提起しているように、個人の主体の問題に還元することなく、個々の差異や多様性を覆い隠して普遍化することなしに、「女たち」の語りを生み出していくにはどうすればよいのだろうか。

本シンポジウムでは、William Faulkner や Nathaniel Hawthorne、そして Lafcadio Hearn などアメリカ文学の巨匠たちが描いた女性像を読み直し、Suzan-Lori Parks や Monique Truong などの現代作家による「女たち」の物語の書き換え／語り直しについて考察していきたい。（松本ユキ）

### 腐敗する Addie を見つめる女たちの結末 ——*As I Lay Dying* における女性たちの語りに着目して

Faulkner 作品において家父長制は重要なトピックの1つであり、男性権威が崩壊していく最中、家庭の内部に生じる不和や問題は多く主題として取り上げられる。そのような男性権威の崩壊が社会や家庭に及ぼす影響は男性にとってのみならず、女性にとっても大きな意味を持つものであったことは言うまでもないだろう。

*As I Lay Dying* は亡き母・Addie を Bundren 一家が埋葬のため Jefferson に運んでいく旅を、複数の視点から描き出す物語である。物語は彼女を運ぶ家族の葛藤や心情を軸に進んでいくが、それを見守る街の人々の語りも重要な要素である。様々な障害に阻まれながら旅を進める Bundren 一家と運ばれながら腐敗していく Addie を人々は様々な感慨をもって眺めるが、その視線に込められた思いは男性と女性との間で大きく異なっているようである。発表では主に女性たちの視線や語りに込められた、彼女らに共有された価値観や人生観について、家庭に関するいくつかのトピックを中心に明らかにしていく。（北口未来）

## Thomas Sutpen の「真実」を語る Rosa Coldfield ——*The Sound and the Fury* と *Absalom, Absalom!* の差異

William Faulkner の *Absalom, Absalom!* (1936) において Thomas Sutpen の生き様を物語る語り手のなかで、Rosa Coldfield は唯一の女性である。従来の批評では、Rosa の語る物語は、実際の Sutpen の姿を伝えるものではない、彼女の主観的な「フィクション」だとみなされることが多かった。しかし、そうした解釈では、女性をロマンティックな存在だと決めつける Mr. Compson を始めとする男性の語り手たちの Rosa に対する態度を反復してしまうことになる。本発表は、*Absalom, Absalom!* 第五章の長大なモノローグをその内的構造に即して読解することによって、Rosa の物語には、男性の語り手があえて見ようとしない、Sutpen に関するある「真実」が含まれていることを明らかにする。その際、*Absalom, Absalom!* と *The Sound and the Fury* (1929) の間テキスト性にも着目したい。Quentin は Rosa が語る Sutpen の「真実」から頑なに目をそむけ続けるが、その理由の一つは、「記憶」「言語」「血縁関係」といった観点から見て、Rosa と Sutpen の関係性が Quentin とその妹 Caddy の関係性に対するアンチテーゼとなっているからである。（楠元淳平）

## Suzan-Lori Parks の *Fucking A* におけるドラマツルギー分析——TALK を用いる女性たち

権威化された「文学史」と「歴史」に対して懐疑心を抱く Suzan-Lori Parks は、白人優位の言説を脱したオールタナティブな歴史の創造を試みる。Parks の再解釈と創造は、『緋文字』にも向かい、『緋文字』から着想を得た姉妹作には、“A”という文字と黒人の Hester が登場する。

そのうちの一作である *Fucking A* (2000) では、TALK と呼ばれる人工言語が使われる。TALK は、女性が男性の批判や性に関する話をする際に用いられる。男性の中には、TALK を理解できる者とあえて学ぼうとしない者がいるが、男性は、自らの立場を守るためにも、TALK を使ってはならないとされている。上演においては、TALK の英語字幕が提示され、観客はその内容を視覚的に理解できる。本発表では、Parks のドラマツルギーを分析し、視覚的に読まれる TALK の効果と絡めながら、女性たちが置かれる苦境や連帯を明らかにする。（田所朱莉）

## Lafcadio Hearn を読み直す／書き換える——*The Sweetest Fruits* における女たちの語り

Monique Truong の三作目の小説 *The Sweetest Fruits* (2019) は、三人の女性（もしも伝記作家の Elizabeth Bisland と小説の書き手の Truong 自身を入れるのであれば五人）の視点から、Lafcadio Hearn という人物の形象をたどったフィクションだ。女たちは様々な方法で彼の物語を読み直し、書き換えていく。Hearn という人物について語る時、彼女たちはそれぞれ異なる名（母の Rosa Antonia Cassimati は自分が息子に与えた名前である Patricio、シンシナティで結婚した Alethea Foley は Patrick の愛称の Pat、日本で妻となった Koizumi Setsu は日本名の Yakumo）で、彼に呼びかける。彼女たちの知っている Hearn の姿は全くの別人とっていいほど異なっているが、共通する点としては、彼はまるで幽霊であるかのようにすでにそこには存在しないということだ。本発表では、女たちがどのようにして、Hearn の物語を読み直し、自分たちのものとして語り直し、書き換えようとしているのかを考察したい。（松本ユキ）